

第3節 日宮城址現況測量調査

第1項 調査に至る経緯

日宮城址は、射水市日宮地内の丘陵端部に築かれた中世の山城である。城が位置する、現在の丘陵北側縁辺部は急傾斜地となっており、長年の風雨の影響によって、オーバーハング状を呈する崩落危険箇所が生じている。土砂災害の危険性が年々高まる中で、射水市及び近隣住民によって、災害未然防止工事についての検討が進められてきた。

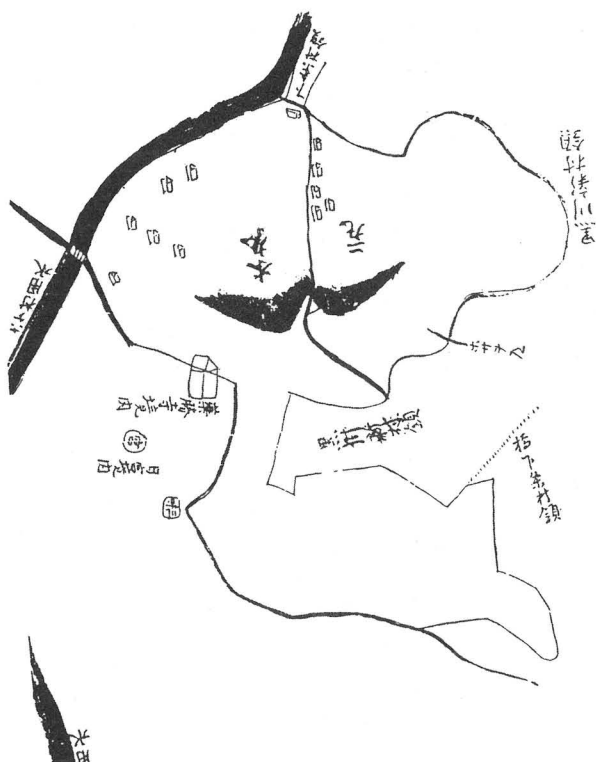
工事の実施に際しては、城址の保護措置が必要となるが、詳細な測量が未実施のため保護を要する範囲が明確でない現状にあり、具体的な工事計画の策定が困難となっている。

このような経緯から、射水市教育委員会では、緊急に現況測量調査を実施して、城址の正確な範囲を確認し保存を図る資料を備えることとした。

第2項 調査の方法

現況測量調査は、専門業者に測量図化を委託して実施した。災害未然防止工実施時の機材その他の搬入経路等によって、丘陵全体に影響を及ぼす可能性があるため、測量調査対象範囲は本丸が所在する丘陵全域とし、工事計画との照合のため、隣接道路まで含めた。ただし、丘陵南方の一部については、過去に現況測量が実施済のため測量対象外とした。成果図は、全体の現況測量図に加え、既存縄張図との照合のための遺構図を作成した。

測量は、トータルステーションを用いた三次元水準測量によって、等高線25cm間隔の地形測量を行い、遺構については全ての変化点を測定し、地形測量点とは別に整理した。現地測量は、平成21年3月9日から3月21日まで実施した。これに先立つ同年3月2日、中世城館研究者高岡徹氏の協力を得て現地踏査を実施し、各遺構の位置確認と測定点の確認及びその密度について現地に於て協議した。19日には、再度の現地踏査を実施、測定点及び測量素図を現地において遺構・地形と照合した。



第34図 「日宮新村見取絵図」及び周辺旧地形図



左：「日宮新村見取絵図」（財団法人高樹会蔵）
右：昭和30年代の旧地形図（1：5,000）

第3項 調査の結果

測量調査により、諸説あった城郭関連遺構の範囲及び地形の全容を確認することができた。特に、本丸推定地への3箇所への出入り口や、本丸推定地北側の狭小な平坦面の存在、丘陵南端に残る土塁状の地形の形状などの遺構の細部形状が明確となった。また、丘陵北西斜面部での崖面崩落や開発等による遺構の消滅及び遺存範囲を把握することができた。

なお、測量調査の過程で、平成14年度の発掘調査時に検出された、日宮城築城前に存在した弥生時代の大溝の痕跡を3箇所を確認した。

第4項 神保氏と日宮城

高岡 徹

1 日宮城の位置と性格

日宮城は越中中央部の射水平野に臨む、標高約21～27mの丘陵端部に築かれた中世の城郭であり、戦国期の史料には「火宮城」と表記される。城跡の約250m北方には越中の主要交通路であった北陸街道が東西に走る他、近くの黒河から婦負郡の長沢を経て飛騨に至る街道も存在した。一方、城下集落である二ノ井を流れる下条川によって、日本海に面した港町放生津とも結ばれていた。すなわち、日宮は越中中央部にあって、東西・南北の交通路が交差する要衝に位置していた。江戸時代の書上などには、神保長職や同源七郎、同孫七郎、同孫太郎などの城主名があげられている。

神保氏は室町・戦国期に射水・婦負二郡の守護代を務めた有力国人である。その最盛期は16世紀半ばの長職の頃で、当初は富山城を本城とし、東の芦峯寺から西の氷見にかけての地域を支配下に置いた。その支配領域内の要衝である放生津、守山、増山、滝山などには一族や重臣の拠る支城があり、それぞれ郡支配の拠点を形成した。

城郭としての日宮城は郡支配の拠点としては小さいが、有力家臣（寺嶋・小嶋氏）の屋敷がそばに置かれ、付近の橋下条に出城とも言えるべき館が存在したことから、拠点城郭としての性格を十分に備えている。神保氏の支配領域内にあっては、本城の富山と西の支城群（放生津、守山、増山）をつなぐ中継拠点としての役割を果たしていたとみられる。橋下条の館は北陸街道沿いの平地にあって、周囲に堀をめぐらした単郭の居館であり、江戸時代の書上などには館主として神保孫右衛門の名が伝えられている。現在、その正確な位置は不明である。

2 日宮城の構造

真言宗薬勝寺の北側に連なる丘陵を「城山」と呼んでいるが、ここに主郭（本丸に相当）が存在した。江戸時代の書上類には、日宮城を構成する郭として本丸・南ノ丸（越中古城記）あるいは本丸・二ノ丸・三ノ丸（越中古城館跡記）といった名称をあげている。これらの郭の呼称は江戸時代のものであり、城の存在した戦国期の呼称は不明であるが、前記の記事から丘陵上に複数の郭が存在したことが知られる。また、城の背後にあたる東側から南側にかけては深い沼田によって守られていたが、現在では埋め立てにより住宅団地や道路に変わっている。

「越中古城記」は本丸の規模を東西21間・南北7間とし、ほぼ城山丘陵最上段の規模（40m×17m）に近いことから、この最上段一帯を本丸とみなしてよい。これに対し、二ノ丸以下の郭の所在地は明白ではないが、一つの手がかりとして、城跡付近を描いた江戸時代の「日宮新村見取絵図」に「本丸」と「二丸」が見出される。まず、本丸は前記の丘陵最上段一帯とみてよいが、二ノ丸はどうか。

筆者は以前、同絵図中の本丸・二ノ丸間の道を現在の丘陵北側裾を通る道とみなし、二ノ丸は城山の東側に隣接していた小丘陵（過去に消滅）と推測した（『小杉町史』、1997年）。しかし、最近に

なって前記の絵図が比較的正確に当時の状況を示すことに気づいた。そのように見れば、本丸・二ノ丸間の道は本丸推定地の東側を通り、城山丘陵の南端に降りていたと考えられ、絵図に記す二ノ丸は本丸推定地東側の平坦面とみなすことができる。ここで以前の考えを訂正しておきたい。

さて、近年の発掘調査により新たな成果が得られた。調査の結果、本丸推定地を中心に展開する切岸や平坦面の原形が弥生時代から存在したこと、さらに本丸推定地東側の切岸直下にも防御のための空堀（大溝）が設けられていたことが明らかとなった。今回の測量調査では、この大溝の痕跡が、本丸推定地の下をめぐる平坦面外縁部でも3箇所を確認できた。このことは弥生時代に当丘陵の中腹が切岸と空堀による防御施設によって守られていたことを示すと考えられる。

空堀などの防御施設を備えた弥生時代の遺跡を高地性集落と呼ぶが、当地の遺構もその一種と考えられる。本県の場合、これまで呉羽山丘陵の白鳥城（現富山市）や天神山城（現魚津市）などに報告例があり、いずれも中世の山城跡と重なる点が興味深い。とりわけ中世において基本的な防御施設である堀や切岸などが、すでに弥生時代より同様の施設として認識されていた点が留意される。日宮についても、中世の城郭以前に弥生時代の高地性集落が存在したわけであり、長い年月を経ても同じ場所が軍事的な要地として選ばれたことに注目したい。そして中世の築城にあたり、弥生時代の造成地形（切岸・平坦面）を城郭の縄張に利用する形で、それをベースに築城されたとみられる。同様の例は白鳥城にも見られ、本丸をめぐる空堀が弥生時代の溝を改修する形で再利用されている。

なお、残る三ノ丸や南ノ丸とはどこなのか。今のところ明白ではないが、本丸と二ノ丸の推定した位置からすれば、同じ丘陵上で本丸の南に続く平坦面などがその跡とみられよう。以前は薬勝寺境内の奥の高台を想定したが、薬勝寺の境内はむしろ家臣の寺嶋・小嶋氏の屋敷跡と考えたい。

3 日宮城をめぐる戦い

ところで、肝心の日宮城が築城されたのはいつなのか。今のところ、そのことを物語る史料は存在しない。しかし、戦国期に神保氏の最盛期を現出した長職が天文12年（1543）に富山へ進出・築城していることから、遅くとも天文年間には築かれていたとみられる。神保氏の当主長職と日宮城との関連を示すものとして、弘治2年（1556）9月、長職が近くの黒河村専福寺に下した禁制がある。長職は永禄5年（1562）上杉謙信に降り、その旗下となった。その後は増山城（現砺波市）を本拠とし、一向一揆を攻めている。こうした動きは上杉への対応をめぐる家中の分裂と長職・長住父子の対立を招いた。

元亀3年（1572）武田信玄は西上作戦にあたり、上杉謙信を越中戦線に釘付けにする目的で本願寺に上杉攻撃を依頼した。同年5月、顕如は金沢御堂の坊官杉浦玄任率いる加賀一揆勢を越中へ進攻させた。当時、日宮城は上杉方の最前線拠点に位置し、神保長職の旧臣、小嶋職鎮・水越職勝・安藤職張・神保覚広が守っていた。長職はこの年の初めに没したとみられ、親上杉・反上杉の二派に分裂していた家臣団はそれぞれの道を歩み始める。小嶋らを中心とする前者は日宮城に入って上杉勢力圏の西端を固め、寺嶋らを中心とする後者は、守山城の神保氏張と結んで増山城などに拠り、一向一揆との連携を図ったとみられる。こうした情勢下で一揆勢が上杉攻撃に向けて動き出したのである。

この年の5月から6月にかけては一向一揆の東進を迎え、日宮城が極めて緊迫した状況に追い込まれた時期であり、当城が一次史料に登場する唯一の時期でもある。5月23日、小嶋職鎮らの城将は急を告げる知らせを新庄城（現富山市）に駐留する鯨坂長実を送っている。鯨坂は河田長親と共に越中に在番する上杉勢の統括者である。それによると、「加賀の一揆勢が河上五位庄に着陣するのは確実であり、すぐに越後からの援軍が遅れぬよう注進していただきたい。（こちらからも）明日には春日山へ飛脚を走らせ、報告するつもりである」としている。

日宮城からの知らせを受け、翌24日、新庄城の鰐坂からの注進が越後春日山へなされている。一揆勢の東進開始は6月半ばのことである。この間、日宮城からは飛脚が度々新庄城へ走り、情勢を刻々と報せたはずである。さらに「後詰が遅れるようならば、せめて五福山へ人数を上げて支援してもらいたい」との要請が新庄城へもたらされた。五福山とは呉羽丘陵の最高峰（標高145m）を指し、後世に白鳥城と呼ばれた山城があった。古くから越中中央部の軍事拠点として利用された所である。

要請を受け、上杉勢を統括する鰐坂長実と河田長親が協議し、五福山へ支援の人数を上げたのは6月15日であった。ところが、五福山へ思いがけず一揆の大軍が攻めかかってきた。上杉方は懸命に防戦したものの退却のやむなきに至り、神通川の渡し場で一揆勢の追撃を受け、ついに敗北を喫した。上杉勢の中にあつた三本寺定長の部隊では、追いつがう一揆勢のため野本玄蕃允・四月一日新右衛門尉・木村善介を始めとして二十人余りが討死したという。上杉方としては思わぬ敗北であつた。

一揆勢の五福山急襲による上杉方の敗北は、日宮城の守将が一揆方と和談の上、すでに城を明け渡して退去していた事実を、上杉方に連絡しなかったことによる。6月17日付けで鰐坂が直江景綱へ送つた書状によれば、日宮城将が和談の上、15日から石動山へ退去しておりながら、そのことを上杉方に隠していたこと、そのため一揆方は後の心配もなく一気に攻めかかってきたことを述べている。

一方、退去した守将の一人、小嶋職鎮は16日付けで鰐坂に城明け渡しの事態について謙信への取り成しを頼んでいる。そして自らの身上についても、何分にも謙信の仰せ次第であると畏まっている。詳しい状況は不明であるが、小嶋らが上杉への急使を仕立てたものの、一揆方の封鎖線に阻まれ果たせぬ内に五福山への攻撃が開始されたとも考えられる。

いずれにせよ、五福山と神通川渡し場での勝利に乘じ、一揆方はそのまま富山城を占拠する。これに対し謙信は自ら越中へ出陣し、以後、一揆方との長期の対陣が続くのである。それはまた信玄が望んだ事態でもあったと言える。このように元亀3年から翌年にかけての富山城をめぐる戦いは、日宮城がその発端となつたのであり、越中戦国史の中での大きな舞台の一つとして位置づけられる。

4 神保長住と日宮城

ところで、日宮落城後に注目すべき史料がある。元亀3年10月28日付けで神保総三郎長国が日宮東方の黒河専福寺の百姓源右衛門を専福寺被官人の扱いとし、公用等諸役の免除を認めたものである（専福寺文書）。元亀3年の10月と言え、夏以来一向一揆勢が富山城を占拠し、謙信と対陣が続けていた時期にあたる。日宮城にはすでに述べたように、6月半ばまで上杉方に属する小嶋職鎮らが在城していたが、一向一揆の来攻に際し、和談のうえ退去している。その後、神保長国が日宮城にあって前記の下知状を発しているとすれば、長国はこの時反上杉方の立場に立っていたとみなせる。興味深いことに、この長国はのちの天正5年2月に倉垣庄内の打出西町の地を京都の成就院に寄進している。しかも、その寄進は長国の越中還住を祈念したものなのである。

つまり、長国は越中が謙信によって制圧されるそれ以前に国外に出て京都に上っていたと考えられる。神保氏の中でこのような境遇を送つた者と言え、長職の子で父と不和になり、越中から京都に出た長住がいる。そうであれば、この長国こそ謙信没後の天正6年4月、織田信長の後援を受けて越中への帰国を果たした神保越中守長住にあたると考えられる。この点は最近の久保尚文氏の研究成果を受け（久保尚文2008『山野川湊の中世史』）、以前『小杉町史』に書いた内容を若干改めたわけであるが、そのように見ていくなら、前記の専福寺の史料は、反上杉の立場に立つ長住（長国）が一揆方の落とした日宮城に一時拠り、黒河など周辺地域を支配していた状況を示すものとして注目できそうである。とはいえ、その状況は長続きせず、やがて一揆方の弱体化に伴い、長住は京都へ逃れることになったのであろう。